
夕焼け色のイラスト

ハシルケンシロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕焼け色のイラスト

【Nコード】

N1998B

【作者名】

ハシルケンシロウ

【あらすじ】

あたしの彼氏はイラストレーター。夕焼け色がとっても綺麗なイラストを描く人なんだ。

（前書き）

企画、【色小説】にエントリーしています。
エントリー作品群は

色小説

とサーチをかけてくださると全てヒットします。

様々な先生方の作品をお楽しみ頂けます。

どうしても決まらない。

色を付けるのが仕事なのに、あたしの染まるべき色が、全く決まらない。

あたしの彼は、イラストレーター。

いつも仕事場で、真剣な眼差しを向けてくれる。

……、なのに、あたしの周りには、いつも他の女……！
しかも彼は、時々あたしには目もくれずにそいつらにちょっかいを出すことがある。

心の底から不愉快だ。

……、そうか、だからあたし、こんなに赤いのか……。

彼が仕事にやって来た。

あたしはこの、アトリエの扉が開く瞬間が大好きだ。

それまでは、他の女達と一緒にたに、自分の色を少しも出すこと無く、薄暗くて狭いこの、檻のような空間でおとなしくしているしかなかったあたしが、彼と手と手を取り合うことで、あたしの色を存

分に出すことが出来るのだ。

だからこそ、他の女が鬱陶しくて堪らない。

この世に女なんて、あたしだけでいいのに……！

邪魔だよ！

彼のイラストは、夕焼けがバツクなことが多い。

あたしの大好きな【赤】。

この人は、赤の使い方がとても上手い。

いつもいつも、見ごたえのある様々な【赤】を見せてくれる。

そうか、だからあたし、この人が大好きなんだ……。

檻を解放して、彼があたし達に日の光を与えてくれる。

嗚呼、まるでウイグル獄長の気まぐれでしか日の光を拝めない【監獄要塞カサンドラ】みたいだ……。

でもだからこそ、彼と会えるのがとても嬉しい。

狂っていると言われようがなんだろうが、それがあたしの気持ちなのだからしかたがない。

あたし達に向かって、彼が手を差し延べてくれる。

《さあ、お願い、あたしと手を繋いで！

この女達の中からあたしを選んで!》

いつもいつも空振りに終わるこの想い。

彼がいつも最初にちよっかいを出すのは、黒い女だ。

こんな女、埋めてしまいたい、沈めてしまいたい、燃やしてしまいたい。

彼の前から消していまいたい。

でも、それをしてしまうと、彼が仕事を出来なくなること、あたしにそれを実行する能力が無いことも、あたしはちゃんと知っている。

悔しいが、放ってしまうより他に無い。

精神衛生上これほど宜しく無い状況も無いだろうが、これまた悔しいことに、次第に慣れてしまつて来た自分がそこに居たりする。それがまた、今までとは別な苛々を与えてくれる。

……、そうか、だからあたし、こんなに純粋な赤なんだ……。

イラストは、8割方完成している。

あとは、彼のトレードマークとも言つべき夕焼け色にバックを染め

るだけ。

いよいよやって来るあたしの出番。

《あーん、長かったよ、待ちわびたよ。

さあ早くあたしの手を取って！

今あたし、こんなに鮮やかに赤くなってるよ！》

彼があたしに向かって、手を伸ばす。

あたしも必死にそれに答える。

そして二人の手が、今がうちりと……、繋がった。

イラストは、見る見るうちに、夕焼け色に染まっていく。あたしは彼と共に、喜びに身を躍らせながら、骨身を削って夕焼け色に染めていく。

そう、まさに【骨身を削って】。

「今までお疲れ様。

君には世話になったね。

今日までほんとにありがとう」

仕事を終えたあたしに彼が労いの言葉を掛けてくれる。

そして彼はあたしをいつもの檻ではなく……、

燃えるゴミ用の屑籠へと、捨てた。

あたしの名前は、赤峰夕香。
イラストレーター見習いだ。

赤い色の使い方がとても上手い、金村勇作という先生の家に住み込みで修行させてもらっている。

先生の絵を見て一目惚れし、迷惑を承知で弟子にしてくれと頼み込むつもりで、そう、【うんと言っただけで帰らんぞ！】位の覚悟で挑んだのに、拍子抜けするぐらいあっさり許してくれた。
それも、住み込みで。

初めて先生のアトリエを訪ねたとき、あたしが初対面な、間違い無く初対面だった筈の先生に対して抱いていた、なにか大分前から恋愛感情を抱いていたかのような既視感、微妙にデジャビュな感覚は間違いでは無いことに確信をもった。

あたしはついこの前までここで使われてた【赤鉛筆】だったんだ。
そして、あたしが一目惚れした絵。
あれは……、

あたしが彼とやった最後の仕事、彼と描いた最後の作品だったんだ。

三年後、あたしは彼と同じ時間を歩むこととなった。

E
N
D

（後書き）

主が特別な感情を持って扱って来た物品には、それに応じた感情が宿ると言います（＾Ｏ＾）

そして、その感情は、物品としての役割を終えたとき、同じ感情を持っている人間に乗り移り、成就されると言われています。〇（＾－＾）〇

このお話は、それがベースとなっています
¥（＾ー＾）／

ではでは（＾〇＾）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1998b/>

夕焼け色のイラスト

2010年10月20日13時31分発行